◆2021 年 6 月第 4 週の奨励
■日時：2021 年 6 月 27 日（日）
■場所：立川教会
■奨励：Y 姉
■奨励題：「教会を離れていた頃」
■聖書：旧約イザヤ書第 2 章 4 節
※ニューヨーク国連広場「イザヤの壁、非戦、平和の願い」「イザヤ・ウォール」
■讃美歌：78「わが主よ、ここに集い」・226「輝く日を仰ぐとき」

奨励教会を離れていた頃

立川教会 70 周年記念誌の私の一文を読んでくださった方に「苦労したのねー」と云われびっくりしました。私は全くそのようには思っていませんでしたから。誰でもそれなりに苦労はあります。だから生き甲斐もあるのだと思います。

今日は、何故、長いこと教会に行けなかったのか、という、私にとっては重いテーマだった話をしたいと思います。言い訳がましくて、実は気が進まないのですが・・・

私の高校時代は半分以上、父との 2 人暮らしでした。

大した理由があったわけではないのですが、上の兄の家、横浜に母はいました。父は公務員でした。私が家事仕事をしていました。食事の支度やそうじなどは苦になりませんでしたが、洗たくは苦手でした。

宇都宮は北関東で、冬は寒いところです。洗濯物は干す先から凍るのですから。

炊事はいろいろ工夫した憶えがあります。ある朝、いつものように御飯を炊こうとコンロに火をつけました。すると父がとんできて「もう炊けてる」といいます。冷たい御飯がありました。私が夜中にねぼけて炊いたようです。

カタカタと釜のフタの音がするので目覚めた父が気づいたそうです。「火事にならずに良かった」と云いました。火をつけて、又、布団に入って眠っていたのですから。

父は一風変わった人で気難しい男でした。前もって生活費を渡してくれませんから、八百屋さん、魚屋さん、肉屋さん、帖面を作ってもらい、ツケで買っていました。他の人もそんな風だったのかもしれません。

父と枕を並べて寝る時はよく話をしました。だいたい父の人生観、女性観が主だったと思います。高校生の娘に少し変ですが、父の生い立ちを知るとうなづけました。幼い頃、母を病気で失くし、ウチに居た女中さんが新しい母になった。（昔話という感じですね）弟が生まれ差別されて育ったそうです。母恋しいという気持ちが女性観に濃く影を落としたようです。

高校一年の秋、放課後で一人で描いていた絵が栃木県の県展に入選になり、高校生ということがあってか、地元の新聞に大きく載ったのですが、美術の先生は私にことわりもせず出品してたので、新聞が壁に貼り出されていた時は私はびっくりしました。その後の先生方は私に対してずいぶん優しくなってきました。理解して下さったのでしょう。

私は教科の好き嫌いがとてもありました。高校は元師範学校の県立女子高でした。裏庭には昔のレンガ造りの校舎や壊れたプール、中に続く木戸などがあり、ほとんど気味悪がって人は来ませんでした。私のお気に入りで、授業をサボってはあたりを徘徊し、プールの底で青い空を眺めて色々空想したり絵を描いたりしてました。その延長にキリスト教を受け入れるという気持ちがあったように思います。

こどもの頃は姉に連れられてカトリック教会に行ったりしていましたが、高校 2 年に日本キリスト教団の宇都宮教会で洗礼を受けました。もうじき大学受験という時に、今程勉強第一という風ではなかったのでしょうね。

1960 年に吉祥寺にあった美術学校に入学しました。60 年安保闘争の激しい波に全校生徒がのみ込まれていました。その頃体調が悪く私はデモに参加していませんでしたが、30 余名の検挙者を出したのです。仲間の為に街頭に立ってカンパを呼びかけました。午前は吉祥寺駅前、午後は西荻窪駅と一日中声を枯らしていました。当時は一般市民も共鳴する人が多

く、一日 1 万円もお金が集まりました。

美術学校というのは一般大学とはかなり変わっていました。まず汚い、ほとんど貧乏、絵画きになりたくて大学を卒業してからまた入り直している人も結構いました。妻子持ちの大人の男性、同棲している年上の女性等、おもしろいです。

私は横浜の兄の所に寄宿していたので、馬車道にあるＳ教会に転会していました。教会ではほとんど人と話をした記憶がありません。いつも黒いガウンをまとった牧師は近寄りがたく何よりもあまり聖書を読んでいない私は質問なんかされたら大へんと思って逃げていたのかもしれません。

親からは授業料しか貰っていませんでしたから、教材はじめすべて自分で稼ぎ出さなければなりませんでした。バイトは好きでした。初めてのバイトは忘れられません。杉並の善福寺池の近く、広い庭を持つ家の草刈りでした。草取りではありません。笹やぶでした。友人と２人でやりましたが、犬の頭の骨が出て来たり、友人は１日でやめてしまいました。２日目は私１人でやりました。日給 350 円、当時としても安かったですね。本屋の店員は学校の帰りに夕方から出来るので長く続けていました。美術工芸社の仕事は最も好きでした。デパートのイベント、会場作り、ウィンドウディスプレイ、博覧会の造り物、会場作り、ロートレックの小さな絵を２m位に拡大して描く等、とても沢山の仕事を教わり、憶えました。働いている人は全員男性で若い器用な人や年配のおじさんは図鑑の下絵を描いていました。卒業したら就職しませんかと声をかけて下さいました。

反物に絵を描く、いわゆる「手描きの着物」の仕事は、ずらりと 10 人位の女性が座って白い絹地に描いていました。

女工哀史ねとよく笑いました。出来高払いの給料で、私はずいぶん収入がありました。大卒の月給が 2 万円といわれていた頃、3 万円位もらっていました。

美術学校の 4 年生になる前の春休みに父が急死しました。北海道に旅行中、富良野にいる父の叔母さんの家で心筋梗塞でした。実の母のように慕っていた人の家で息を引き取ったのです。ずいぶん迷惑をかけました。

大へん身勝手な人で、ルカの福音書にある「放蕩息子」のようです。私と下の兄が生まれる前、妻と子ども 2 人残してオートバイ 2 台持って中国・青島（チンタオ）に一年半も放ろうして遊んでいたそうです。ずいぶん母は泣かされたと思います。父は６２才で死んだのに親せき中は「ヤレヤレ」という顔でした。

私は父の身勝手な愛情からやっと解放され、悲しみの中でずいぶんホッとしていました。悪い人ではなかったけど全く家庭には不向きな人でした。

末っ子の私は、下の方から上の兄たちを見て、やってはいけないこと、生活の智恵など学びました。上の兄は反抗期でよく父から「出ていけ！」と叱られていました。その度私はと

てもドキドキして、兄と一緒に出て行きました。自転車でゆく時には後に乗って行きましたから家出はできませんでした。

父を見て、こんな男性とは結婚しない、母からは女性は自立しなければいけないことを教わりました。母とは長い間に少しずつ確執が生まれてゆきました。そして、私の結婚相手は母を大切にしてくれる人がいいと強く思っていました。

美術学校を卒業して兄の所を出るべく準備をしました。3ヶ月の生活費を貯めて（6万円）引っ越しました。少々遠くても広い部屋をと思い、小平の青梅街道駅、歩いて5分の所に小さいアパートを借りました。6畳一間、共同台所、風呂なし暖房なし、冷蔵庫は月賦で買いました。お風呂はとなりの駅。電車の中で、洗面器をもっている私を見て、サラリーマンがクスクス笑っていました。

24才の時に結婚しました。同じグループで北海道・稚内出身で6才年上のYです。舞台美術の会社に勤めていました。TV局の大道具の仕事で、当時はVTR録画もなく、全部ナマ本番でしたから勤務体系が不規則で夜勤もあり、休みも少なかった。世間がレジャーなどと浮かれている時は書き入れ時でした。彼は組合活動もしていましたから。

絵かきなのですから自分の制作もありました。私とは価値観が似ていておもしろい人でした。ジョークや駄じゃればかり云っていました。のんべいでした。

その後、西荻窪に引っ越し、朝は中央線上り、下りに分かれて仕事に行きましたが、時々2人共下りに乗って奥多摩に遊びにゆきました。もちろん会社はサボりです。

狛江、府中と引っ越す中に2人の子どもが与えられ、夫は母を引きとってくれました。私がクリスチャンということは知っていましたが、教会には行けませんでした。日曜日しかお休みがないし、私の母の面倒見てくれていましたし。

作品を作るということは、表現する、価値観を作る、人の思考をひっくり返す、ということで構築する上で、信仰というものと相いれないと感じていたのです。30 代の頃は割に社会性の強い作品を発表していました。万博模擬展（銀座 S 画廊）を最後に発表は止めました。夫も私も画廊の借金がありました。家庭を持ち、親となって、いろいろな試練もあり、新しい体験をすることになると、少しずつ判ってゆきました。自分の思考と信仰は対立するものでないこと、キリスト教は私のバックボーンであることに気づきました。

夫は週に 1 日しか休みがなく、私はとても教会に行くとは云えませんでした。私は子どもの画塾（おえかき）を長いことやっていました。生徒も沢山いたのです。家のローンも抱えていましたから毎日はとても忙しかったです。街を歩いている時、台所で御飯の支度をし

ている時、車で仕事に向かっている時、よくお祈りしていました。神さまありがとうございます。何故ですか？時には本当に神はいるのかしら？私は誰に祈っているのだろう？と考えてました。虚無的になったり空しいと思っている時は神さまとの交わりを欠いている時に感じるのかも知れません。

私には 16 才年上の姉が居ります。アメリカ・カリフォルニアに住んでいます。フリーメソジストのペニンスラー教会に行っています。私が遊びに行った時、日曜日に“教会に行きましょう”と云われました。当たり前のような云い方で、私はとっさに行かない、と答えました。姉は仕方なく、私に一枚の CD を残して出て行きました。CD は「輝く日を仰ぐ時」でした。韓国の男性の声でした。繰り返し聴いている中に涙が溢れてきました。東京に帰ったらすぐに教会にゆこう、と決心しました。こうして長いトンネルを出ることができました。

多摩市にあるフリーメソジストの教会です。

礼拝に通い始めて雰囲気、メッセージ、讃美歌、すべてが懐かしく嬉しく、砂に水が染み込んでゆくようでした。

生活も少しずつ変わってゆき、かたくなな心も軟らかくなってゆくようでした。

今、こうして自分の半生を想い起こす時が来たのだとつくづく思います。神さまは私に沢山の贈物を下さいました。

4 年前に夫を天国に送り、今一人の生活になり、少々難アリの身体ですが、元気に楽しく生きてゆけるよう心がけています。

私の生きてきた道は不思議なことが多く、地図で見つけた立川教会との出合い、ホームへの入居。もう一つ、立川教会 60 周年記念誌に何と恩師の名前を見つけました。本当に驚きました。60 年も前に私にバプテスマを授けて下さった名簿 90 番の方、宇都宮教会、牧師名は小池正です。地方の教会の名前を見て心が熱くなりました。

今の自分と地続きであったことに感動しました。

神さまのご計画とあわれみに心から感謝いたします。

アーメン